

竜宮に還った引揚者

千葉県 村上 明

一 旅順時代の回想

両親の出身地は、JR唐津線の佐賀、西唐津駅のちようど中間に位置する佐賀県東松浦郡相知町で、長閑な田園風景の広がる田舎町です。

佐賀県は、吉野ヶ里遺跡を始め観光地の穴場としてテレビでも放映されることがあり、新鮮な魚介類を始め佐賀平野で収穫される光沢のある銀飯を頬張りながら、風光明媚な景色を眺め、人情の厚い佐賀弁を聞くと、身も心もリフレッシュされます。

満州に出て来た経緯は、今となつては確かめようもありませんが、父岩蔵は関東州旅順市千歳町で理髪業を生業とし、この地で骨を埋める覚悟でいました。お説教の締め括りは、跡継ぎは中国人でも良いと口癖のように言っていました。

私は、この地で父岩蔵の五男として出生、昭和十五（一九四〇）年旅順師範附属小学校に入学、昭和二十年八月旅順師範附属国民学校在学中に終戦を迎えました。

昭和二十二年一月「永徳丸」に乗船して、もう一隻の引揚船「明優丸」と共に二隻で大連港を出港、同年一月三十一日に佐世保港に入港、同地の援護局に同船者一同と共に親子六人収容されました。そこで、落ち着く先は開拓団員となつて新開拓地に行くか、縁故を頼つて自ら落ち着き先を決めるかの二者択一を迫られ、親子で眼を赤く腫らしながら、激論を三日三晩交わしたのを覚えています。結局、二月五日には父の長兄を頼つて佐賀県小城郡北多久村篠原に転入することに収まり、夢にまで見た祖国日本での第一歩を踏み出すことになりました。

二 小学生時代

旅順生まれの旅順育ちの我が家は、理髪業を共働きで営んでいた関係で忙しく、家には中国人の

職人と子守りの姑娘が働いていました。姑娘はとても気丈な女性で、子守りをしながら洗濯、掃除まで主婦業の一翼を担って、家族の一員として貢献していました。中国の人々は勤勉で働き者が多く、十八歳になると自ら次の姑娘を手配して嫁入りするという、まるで約束ごとのように引継ぎを自然に行って、主家に迷惑がかからないように気配りをしていました。職人さんは、家族を持った温厚な人柄のヤンさんとエンさんの二人が働いていましたが、終戦のときはエンさん一人になっていました。

小学校二年生の十二月に大東亜戦争が勃発、戦時一色の少年時代を送ることになりました。しかし、学校で教育されるほど子供心には戦争に対する逼迫感はありませんでした。振り返ってみると、中国人の間では食料品を始め日常生活物資が不足して、日ごとに生活が苦しくなっていました。新婚のエンさんの奥さんが、片言の日本語で「コンニチワ」「サイナラ」と言って、手作りの弁当

を毎日持って来ていました。エンさんは居間にあって昼食を摂っていましたが、トウモロコシの粉に山草を混ぜたパンが主食のようでした。姑娘が気を利かして味噌汁と夕食の残りのおかずをそつと差し出していました。そのときのエンさんの顔のほころびようは、今も脳裏に深く刻まれています。天秤の籠の前後に、旬の野菜を山積みにした中国人の老農夫が街の中を売り歩いていましたが、闇販売だと言って警察の巡捕(巡查の補助者)の中国人に捕まって締め上げられている姿を、子供ながらに義憤やる方無い思いで派出所の窓から覗いていました。中国人の子供たちは、冬に備えてオンドルで燃やす落葉を拾いドンゴロス(麻袋)に詰め込んだり、一軒ある豆腐屋に徹夜で並んでオカラを購入し、食糧を確保していました。姑娘の話によると、その時分から中国共産党の活動として、「今しばらくの辛抱だ!」と極秘裏に村々に伝えていたようです。一方、日本人と結婚していた白系ロシア人には、尾行が着いて不自由

だと店に来てこぼしていました。

我が家は父が信心深く、早朝のお勤めと言って、六時から神棚の前に全員で正座して、高天原の祝詞を延々と三十分近く唱え、神様に感謝することから一日が始まっていました。学校に行けば、東方の宮城に向かって最敬礼に始まり、天皇陛下の御真影に最敬礼、戦勝祈願、軍事教練の真似ごとなどなど、軍事一色の練り返しの日々でした。学校から帰ると、蜘蛛の巣と竹竿で蟬取りの道具作りから始めて蟬取りに興じたり、近くの塩田に行き鱈掬いや鯨釣りをして楽しんでいました。

学校教育と日常生活とのギャップは大きく、戦時下に置かれていることを、自分自身の問題として自覚することに欠けていました。

小学校も国民学校と改められ、昭和二十年になると教師に召集令状が突然にきて、出征兵士として戦地に赴き、その空席を教生が埋め、教壇に立つようになりました。教生は、若さに任せて授業内容も二言目には大和魂の押し売りが横行し、虚

弱体質の生徒は非国民と言われて、肩身の狭い思いをさせられる羽目になっていきました。十三歳の中学生が少年兵として志願せざるを得ない環境が作られ、体力を鍛えることが優先されるようになっていったのも、このころからでした。

三 兄の出征

我が家も例外ではなく、昭和二十年五月には師範学校の二年生ではなく、一年生（十七歳）として通学していた次男道広に召集令状がきました。なぜ二年生は召集されずに、年少の一年生が召集されたのか、今もって分かりません。旅順駅頭は、出征兵を見送る人々で黒山になりましたが、歓呼の声で見送る大勢の中には、親一人子一人の知人の姿もありました。白地の布に「婦人会」と書かれたタスキを掛けた老婦人が虚脱状態になり、二、三人の婦人に支えられているのが印象的でした。こんな小さな旅順駅からさえ、一銭五厘の赤紙一枚で幾百人の市民が戦場に送り込まれて行ったことは、今にして思えば無念と言うほかはありません。

せん。

元気な声で、頑張つて来ますと若者らしく大きく手を振つて車上の人となつた兄は、気のせいか幸せそうにも見えませんでした。後にも先にも、これが旅順師範学校一年在学中の、十七歳の兄との最後の別れとなりました。

四 戦後の体験

終戦を知つたのは、国民学校に登校して、友人の小林君から玉音放送のあつたことを聞かされたのが最初でした。半信半疑でしたが、中村先生からお話を伺つて、戦争が終わつたことを納得しました。しかし、特別驚いたわけではありませんでした。むしろそれよりも、家族の一員と思つていた姑娘と職人のエンさんが、手際よく八月十五日を境に痕跡を残さず姿を消したことに驚愕しました。

一週間後には、米軍機のグラマンが朝な夕な飛来して、静かな新市街が騒々しくなってきました。その二、三日後、ソ連軍団の砲兵部隊などの隊列

が、途切れることなく轟々と騒音を響かせて街を通過して行きました。それと並行して、自動小銃を肩から提げたソ連軍の歩哨兵が、街の角々に終夜立哨し始めました。ここに至つて、初めて終戦というものを肌で感じました。不思議なことに恐怖感ほとんど無く、汗と油で染まった軍服を身にまどつていたソ連少年兵の姿だけが、妙に親しく感じました。肘当てと膝当てのついた軍服は、本来の服地が見えないくらい汚れていて、軍靴は無いよりはましなよれよれで、日がな一日歩哨に立ちながら、昼食はバケツに入られたスープ一杯と酸っぱい黒パンをかじるだけで、ときどき私にもお裾分けがありました。酸味の強いザラザラした黒パンはとても食べ物とは思われないもので、その酸味が今も舌に焼きついています。

八月末になって、ジープにソ連軍の将校と通訳しやうやくが同乗して、建物の物色が始まりました。隣の瀟灑しやうせいな赤レンガの富塚さんの家が、真っ先に短時間で無料接収されました。家財道具などは持ち出す

時間は無く、手回り品の小物を持って立ち退いた様子でした。そのくらい電光石火のごとき立ち退きでした。富塚さんの家は、その後ソ連軍の将校夫婦と従兵の三人暮らしとなりました。私の家は、三軒長屋風の理髪店兼住居の平屋建てであったため、将校たちの好みに合うような建屋ではなく、難を逃れました。

隣の富塚さんの家を住居にしたソ連軍将校の従兵は、片言の日本語を話す紳士でした。とても親切な人で、困った出来事があったら相談に応じるので、遠慮しないでいつでも連絡してほしいと言って、毎日様子を見に来てくれました。白昼堂々と、ソ連軍の将校らしき身なりの立派な体格の女性が我が店に入ってきて来て、飾ってあった絵画を取り外し持ち去ろうとしたので、隣の従兵さんの所に救いを求めに行きましたところ、即座に来て大きな声で叱り飛ばしたため、お陰で盗難を免れることができました。ソ連軍の組織系統はどうなっているのか分かりませんが、隣に入居していた将

校は相当な上級幹部と推測されました。

街門にはソ連軍の歩哨が立哨しているせいか、中国人はほとんど姿を見せず、理髪店にはやはりソ連兵が多く来店していました。店を開いていたせいで、ある日突然に女、子供ばかり十五人ほど、ぞろぞろと店に入って来ました。このような混乱期に、どのような経路をたどって避難して来たのか知りませんが、満州のソ満国境にいた開拓団の方々でした。その人たちは、終戦後の開拓団の惨状を語ってくれました。死の恐怖から逃れるため、睡魔にだけは負けないように互いに声を掛け合って、ひたすら南下を続けてきたそうです。私は同じ敗戦国民といっても、その人たちと私たちを十把一絡げに片付けることはできないとしみじみと実感しました。

我々にも直接このような惨状が伝えられるようになってから、私の知っている限りでは、女性は頭髪を切り落とし丸坊主になって男装をしていますが。日本人の女性は姿を消したことになり、な

んとも奇妙な生活が始まりました。

五 疎開の始まり

隣の従兵さんには、幾度となくいろいろと助けて頂き生活していましたが、旅順の新市街から日本人の姿が消えていく一方で心細くなり、とうとう夜の恐怖感には耐え切ることができずに、遂に我が家も旧市街に自主的に疎開することになりました。中国人の馬車を一台頼み、従兵さんに別れを告げ、旧市街に向けて新市街を出発しました。途中、街角の要所要所でソ連軍の歩哨に身振り手振りで「ダワイ、ダワイ」と声を掛けられてコミッションを要求され、子供ながらに身の細る思いがしました。

旧市街では、あらかじめ手配していた「おかめ」といううどん屋に落ち着きました。食糧は、日ごとに底をついていくのが目に見えるようになりました。主食は高粱、おかずは一斗樽に塩漬けした魚などで、先の見えないその日暮らしが始まりました。

幸か不幸か三カ月で立ち退き命令が発令され、

持てるだけの荷物を持って旅順駅に集結しました。歓呼の声で出征兵士を見送った、同じ旅順駅で貨車に乗せられ、逃げるように大連に疎開しました。

大連は、別荘の多い桃源台の大邸宅に落ち着きました。その別荘の主人は、病弱のために車椅子の生活に入り、日本人の女中を雇い面倒を見てもらっていました。奥様は連鎖街で洋品店を経営、豪華な生活をしていました。一カ月ほどしてから、その息子夫婦が二人の子供を連れてハルビンから避難して来ましたが、誠に冷たいもので、我々と同じく他人扱いでした。このとき初めて上流社会の内幕の片鱗を垣間見ることができました。避難先とは言え、生活水準の格差のあまりの大きさと、家主の息子家族の生活を見るに忍びず、これ以上に息苦しい同居を続けることができなくなり、新住居探しを始めました。

ひよんなことから闇ブローカーと知り合い、密航船で帰国する家族が家を売りたいと言っている

という情報を知りました。売買の条件として、いろいろの理由で出港の時機が確定しないために、船の出るまで同居させて欲しいという、身勝手な言い分でした。元々自宅ではなく、官舎ではないかと思われるほどお粗末なもので、一階は炊事場と居間一間、二階は二間の二軒長屋でした。家主は一階に住み、我々は二階に住むということで合意し、入居しました。

一軒に二所帯が入居する生活が始まりました。しかし、旧家主は出港が決まらなと弁解を繰り返して、結局最後まで居座り、仲介したブローカーも悪びれる様子もなく、似たり寄ったりの人々でした。鹿兒島出身の軍属の人でした。いずれの人も、その後の消息は不明です。

六 中学時代

住む所が決まって少し落ち着いたので、母が近くの南山小学校に編入するように手続きをして、通学が始まりました。小学校を何とか卒業して実業学校に入学しましたが、すぐに大連工業学校と

合併になり、そこでは机も椅子も無く、教本、帳面も無く、黒板の文字を雑用紙に書き写す程度の授業でした。既設の電車は平常に運行されていたので、この電車を利用して通学には不自由しませんでした。

電車通学で思い知らされたことは、電車の管理が中国側に移管されていたため、主客逆転現象が起こり、日本人の社員は街頭で切符売りに変わっていました。そればかりではなく、旧日本軍の将兵がソ連兵の監視のもと、行列を組み移動する姿でした。武装解除した将兵ほど、傍観者のプライドを傷つけるものはないと思います。知り合いの人か肉親かどうかは分かりませんが、隊列に走り寄って食べ物を差し入れる姿も幾度となく見掛けました。

学校に希望を持ってない学内は、人心の荒廃をきたす一方でした。帰国したときの学年編入を考えて、学校に在学証明書を出してもらおう生徒が増えて、生徒数は徐々に減少し廃校同然になっていき

ました。殺風景な部屋で少人数のせいか、さすがに極寒中のコンクリート上での座学は、背筋が凍り付くようで苦痛でした。

しかし、親や兄たちは一日一日を生きるために一生懸命で、街頭に簡易台を並べて雑誌や衣類を立ち売りしたり、日雇いの仕事をしたりしていました。筍生活とはうまい表現をしたもので、皮を剥いでいくように裸になっていくのが、私にも肌で感じられました。旅順から必死になって持って来た品物が、一枚また一枚と食べ物に形を変えて、命をつないでいきました。一事が万事、心細い無計画な日常生活でした。経済的には不安定でしたが、生活の拠点が大連市内であったせいか、治安は比較的良好でした。

七 待望の引揚げ

昭和二十一年の年末になり、待望の祖国への引揚げの通達がありました。町内会の集会が開かれて協議の結果、生活の困窮者から引き揚げることになり、各家庭の生活実態調査が始まりました。

引揚げの準備のためにようやくまとめた荷物は、調査担当者によって再びばらばらにされました。これが日本人同士の行為かと、生唾を飲む思いをしました。

年が明けて、引揚げが決定しました。極寒の中、体より大きい荷物を背負い、大連埠頭に向けて行進が始まりました。絶対に遅れてはならないと行列の前後で励まし合いながら、寒中に汗をびっしょりかき、無我夢中で歩きました。途中で歩けなくなる人が出ると、ロープで体を縛り合い引きずって行進しました。お陰で、私の知る限りでは落伍者は一人も出ませんでした。

精根尽き果てて港に着くと、久しぶりに見る巨大な船が目前に停泊していました。船尾に書かれた「永徳丸」という文字を、何度も何度も読み返しました。

乗船者名簿の不備があつて、待てど暮らせど乗船できず、遂になりふり構わず岸壁のコンクリートの上に、寒いのも忘れ寝転んで待つことにしま

した。

日暮れ近くなつてようやく名簿が揃い、手続きが終了して乗船が始まりました。仮の板で作った梯子は、勾配がきつく板が薄いせいか、しなつて上下に揺れて、海中に落ちるのではないかと心配して、何度も立ち止まつて安全を確認しました。

やっとの思いで甲板に立ったときは、嬉しさのあまり声も出ませんでした。十メートルほど歩いて、今度は船室に入ることになりましたが、ここでもやはり急勾配の簡易梯子が通路になっていました。

「永徳丸」は、貨物船を改造したために船底まで押入のようにだんだんに板で仕切られており、深く目が回るほどでした。何段あるか数えもしませんでしたが、一歩足を踏み外したら取り返しのつかないことになることだけは、しっかりと記憶しています。

我々は貨物並に収容され、わずかに身動きが許される空間を与えられて、これから上陸までここで寝食を余儀なくされることさえ、ただただ感謝

の気持ちでいっぱいになり、不平不満の声は最後まで聞くことはありませんでした。

狭い空間と長い間の困窮による栄養失調と疲労が重なり、乗船後命を落とす人がいました。必死の思いでここまで頑張ってきたのは一体何のためだったのか、引揚船に乗つて一気に緊張が解かれて安心してしまったのだろうか？ と考えると、気持ちが悪入つてしまいました。祖国で待つ家族の方々には、一枚の死亡通知書が届けられて事務的に片付けられ、遺骨さえ届かないことを知りました。死者は毛布に包まれて水葬の儀式が行われ、汽笛一声、台上の死者は、毛布に包まれたまま海の底深く葬られました。水葬は身寄りの無い方のためか、船上から離れて行くときは海の藻屑になるような無常感を実感しました。

大連港からついて来た鷗もいつしか見えなくなつて、しばらく経ち「永徳丸」はやつと祖国佐世保港に錨を下ろしました。

昭和二十二年一月三十一日、我々はポンポン船

に分乗して上陸地諫早に向かいました。兩岸に黄緑色をした竹林が生い茂っている風景は、何か祖国日本を象徴する美しさと力強さを感じました。

森の中から、農婦が手拭いを持って左右に大きく振ってくれているのが見えました。このとき、なぜか兄を旅順駅で見送ったことが稲妻のように脳裏をよぎり、嬉しさと悲しみが入り混じった異様な一瞬でした。ポンポン船は、海面すれすれにまで沈みながら勢いよく進み、海水の飛沫を全身に浴びせ、いやが上にも上陸の喜びを駆り立てているようでした。

上陸して栈橋を渡ると、隊列を組んだまま先頭から順番に白い粉（これがDDTでした）を頭からふり掛けられ、お互いに笑い合いました。係員に声を掛けられても抵抗感が全く無くて、素直に指示に従っていました。団体行動は何をするにも時間がかかり、ただただ我慢の明け暮れでした。

早朝ポンポン船に乗り移ってから、やっと夕刻になって引揚援護局が用意した木造平屋建ての校

舎跡に振り分けられ、毛布を敷いてその一面に落ち着きました。夕食もそこそこにして睡魔に襲われ、翌朝昼過ぎに空腹で目が覚めました。

大人たちは、書類を作ったり会議を開いたり、忙しそうにしていました。我々は、手持ち無沙汰でぶらぶらして過ごしました。それにしても、よくこれだけ多くの人が乗っていたものだと、感心しました。

夕食までに時間がありましたので、上陸時掛けられたDDTの白い粉を落とすため、家族揃って浴場に向かいました。芋の子を洗うように入浴している人でびっくりしましたが、大浴場の喧騒に粉れ、疲れは吹き飛びました。

夕食も済み一息つこうとしたところ、今後の身の振り方をどうするかを決めようと、父が話を切り出しました。近親者を頼って、落ち着くまでお世話になるか、政府が指定した開拓団地に入団するか、いずれにするかをできるだけ早く選択して、この仮設校舎から退居しなければならぬという

ことでした。

八 引揚げ後の新生活

一息つく間もなく先の見えないことを決めなければならず、夜を徹しての話し合いが始まりました。体力さえあれば、開拓団に入団することも考えられました。戦後の生活で弱り切っていたため、親戚を頼って帰省することに父は渋々同意しました。結局、父方の兄の住む佐賀県小城郡多久町にお世話になることになりました。先方も、今まで親交が深かったわけでもなく、突然見知らぬ家族の帰省に戸惑ったことは、筆舌に尽くせない出来事だったと推察されました。

伯父は、多久町で製材所を経営していました。山ごと立ち木を地主から購入して、その立ち木を伐りだし、馬櫃で山から木材を引き出し、馬車に丸太を積んで製材所に持ち込み、建築用材に加工、販売することが生業でした。戦後、戦災によって物資は不足して、失業者も多かった時代でしたが、伯父の家ではその仕事柄、ぜいたくを言わなけれ

ば食べていく程度の仕事はありました。兄は製材所で働かせてもらい、主に山に入り立ち木の伐採、搬出の仕事をして、我が家の生計の手助けをしました。山の仕事は重労働であることは承知していましたが、やはり引揚げ時の栄養失調で衰弱していた兄は、半年ほどで結核に侵されました。

母は、いろいろと父との意見の相違に愛想を尽かし、伯父の家で世話になることを断念し、子供たちは母親の意見に同意して、父と別れて親子五人で鬼塚村にある「マオウ蘭栽培農園」に居を構えました。当時は、麻の代用品としてロープや漁業資材用にマオウ蘭が栽培されており、そこに入園して働きました。女、子供でもそれなりに仕事があり、暇なときは荒れ地を開墾して薩摩芋を育てたり、失業対策事業の河川工事などで働きました。主食は、配給制度で育ち盛りの子供には不十分でしたが、不足分は山草や筍を採って補っていました。引揚げ後の生活は厳しくて、あれだけ教育熱心だった母に似合わず、末の妹を除き男兄弟

けて販売できる氷に固まります。従って、従業員は二十四時間交替勤務になります。当時は若かったせいか、勤務は睡魔との戦いでした。勤務した製氷所は、下関から約一時間のJ R山陰線小串駅から徒歩十分ほどの海岸にあり、小さな漁港と魚市場が併設しており、漁業組合が運営していました。漁船が出港するときには、漁獲した魚の鮮度を保持するため、砕水した氷を船倉にいっぱい詰め込み、帰港したときは魚介類を冷蔵庫に一時保管していました。当時は、食糧増産を目的とした農林漁業融資制度を利用して、製氷工場が次々と新設されていました。漁獲の増産を促し、鮮度を保ちながら流通を円滑にして、魚市場に貢献していました。県漁連もこの融資制度を利用して、山口県下関に百トンの大型製氷冷凍工場を昭和二十八年七月に竣工、それに合わせて転勤となり、下関まで通勤しました。

工場の管理は、少数精鋭を旗印とし、冷凍機の運転はもちろん製氷販売、マグロの冷凍冷蔵まで

幅広く、日進月歩する技術の習得に追われ、身心共に鍛えられました。大量生産大量消費の渦中、公害などの環境問題に対する意識も低く、冷媒にアンモニア、凝縮機には安価な海水を冷却水として使用していました。従って、凝縮機の汚損が激しく、熱伝導が低下し、冷凍能力が落ちて冷えなくなるため、頻繁に清掃作業を行っていました。堅型の凝縮機のため、鉄管の先にワイヤーブラシをつけて手で上下にスライドさせ、汚れを落としていました。

この清掃作業中、鉄管の一部が三千ボルトの工場引込電線に接触し、感電事故を起こして意識不明となりました。救急車で病院に搬送されましたが、体を流れた電流が胸部を外れて足の指先から放電していたため、一命は取り留め後遺症も残らずに、お陰で三週間で退院できました。

この間、冷凍機械主任技術者として転勤を繰り返しながら、精悍な面魂の男たち相手に海の匂いを体に染み込ませて働いた甲斐があって、丈夫な

体で病氣知らずになりました。

昭和三十年には、まだ米の配給制度は残っていましたが、日本も復興の槌音高く、高度経済成長の兆しが見え始めました。化学工業分野も石炭から石油化学分野へと転換を迫られていました。石油化学工業の技術導入が決まったのは、同年七月でした。(三井石油化学工業二十年史より)石油化学工業のエチレン製造に必要な原油ナフサの供給、巨大な製造設備建設に必要な広大な用地、大量の工業用水、原料及び製品輸送のための港湾、鉄道などが必要不可欠とされました。

理想的立地条件を備えていた、山口県岩国市にある旧陸軍燃料廠跡地に白羽の矢が立ち、紆余曲折の結果、大蔵省より払い下げを受けることができました。米軍機による空爆によって、陸軍燃料廠の製造設備は壊滅状態に破壊され、使用不能になっていました。動力設備建て屋の一部は、再利用の方向で石油化学工場の建設が始まりました。空爆によって、多数の犠牲者が工場周辺に散乱、

木材を積みその上で火葬したため、四、五日煙が立ちのぼったほど激しい空爆だったようです。建設中、不発弾も出てきましたが、災害には至りませんでした。

昭和三十一年より石油化学工場の建設が始まるのと並行して、進行に合わせて社員の募集も始まりました。下関製氷工場から岩国市の製氷工場に転勤していた私は二十三歳でしたが、発展性のある新しい石油化学工業に夢を託し応募しました。三十一年、日本は復興途上にあり、就職難の時代でしたが、冷凍技術者の資格を持っていたため、健康診断と面接だけで採用されました。それまで小串製氷所勤務のとき、一年ほど叔父の家で世話になりましたが、迷惑ばかり掛けることもできず、小串製氷所の近くに下宿しました。米の配給制度の中での下宿生活は、空腹対策が最大の問題でした。兄の栄養失調からくる惨憺たる終末を体験して、自分だけは健康第一で過ごす覚悟をしていた矢先でした。主食を確保するゆとりが無かったの

で、身近で容易に手に入る新鮮な魚には、随分お世話になりました。

職業柄二十四時間交替勤務のため、下宿に帰って寝床に入るのが唯一の楽しみでした。目が覚めると、洗濯たらいに井戸から水を汲み上げ、洗濯板をたらいの上に乗せて汚れを擦り落としました。固形石鹼を使用していたので、何回も新しい水と取り替え洗濯物をすすぎました。後はラジオを聴いているうち、食事の仕度で一日が潰れていました。食事の仕度も、六畳一間の片隅で七輪に炭火をおこし、調理をしていました。雨の日の炊事は火をおこすのが大変で、三十分早起きしてました。

昭和三十一年九月、石油化学会社に入社後は、独身寮に入居したため、家事に関する仕事からは一切解放されて自由時間が大幅に増えました。導入された新技術は、従来とは違った全自動運転方式のプラントでした。導入された技術マニュアルの翻訳から始まって、プラントの運転マニュアル

の作成、機器の選定等々、家事から解放された時間は帳消しになりました。

入社後、昭和三十一年十一月陸軍燃料廠殉職者の慰霊祭を行い、起工式が挙行されたのが、昨日のことのように思い出されます。

昭和三十五年七月四日結婚、昭和四十年六月千葉工場建設本部の千葉事務所開設に伴い、次男を妊娠中の妻と共に千葉県市原市に引っ越してきました。

爾来、主として石油化学の製造部門で十年、設備の保守部門で十年、その後開発部門で勤務して定年を迎えました。

十一 不戦の誓い

二人の男の子は、大学を卒業してそれぞれ民間会社に勤務、一人は横浜で一人はブラジルに赴任、孫は四人にて人並に平和に暮らしています。

私は、定年後放送大学を卒業して、一病を抱えながら暮しております。このような暮らしのできる基本は、戦後六十年の平和の上に築き上げられ

たものです。この平和は、幾多の先輩の方々の犠牲の上に築かれたものであることを自覚し、日本国民として不戦の誓いを宣言実行することだと思えます。

戦争の虚しさ、平和の大切さを子孫に語り継ぐ大役を、日々心掛けていきたいと思えます。

私の人生

千葉県 瀧口 ハナ

私は、大正四（一九一五）年の十月十五日に千葉県夷隅郡西畑村田代（現在の大多喜町田代）で、父森川太郎左エ門、母つるの四人目の子供として生まれました。上の三人は全部女で、幼いときは貧乏ながら賑やかに過ごしていました。

小学校六年生のときに学校の掲示板で、千葉市の方の病院で看護婦の見習いを募集しているということを知りました。私は、いつも姉のお古ばかりを着せられていて、新しい物を身につけたことが一度もないので、情け無く思っていたころでしたので、看護婦の資格を取れば自分で何でも思うものが買えると思い、すぐに先生に申し出たのです。まだ六年生の卒業までには二カ月もあるのに、早く申し込まないといっぱいになって採用してもらえなくなると思い、二月十日学校をやめて、